２０２３．１１．２５

兵庫県現代詩協会読書会

～鳴海英吉の「白」の世界～

鳴海英吉
１９２３年東京上野生まれ。本名　加川治良
第二次世界大戦でシベリアに抑留される。その体験を語り継いだ詩集「ナホトカ集結地にて」から、鳴海英吉の世界を紹介したい。

鳴海が描く「白」の世界はシベリアの文字通り原野の色。そこでの過酷な労働と飢えに苦しみながらも人間の生き死にを皮膚感覚のように伝える表現が魂に響く。見渡す限り一面の「白」の世界の中で繰り広げられた出来事、死んでいった多くの兵士たち。「白」は仲間たちを飲み込んだ命そのものであり無念の象徴であるように思われる。

　以下、「雪　１」から部分を紹介する。

大八車の先棒を今日死ぬ奴が握り　後棒を今日死んだ奴が押す　ぞろりとつづくのは　今までに死んだ奴　（中略）真白な丸太になりながら　まだなにかが不安で　それでも凝視する方向を失って　ぼんやりしている
まだやわらかな　今生まれたばかりの死んだものたちの亡霊　仄白い道を　わめきながら殺到していったが　ひとつひとつ凍って夜空に巻き上げられて　くだくだと雪になる　この原野で生きているものはひとつもない　滅ぶものたちだけが前で白く生温かく　俺の方に向かってくる
（中略）忘れられた奴が墓穴を這い上がり　仄白い雪明かりのわめきながら駆けてゆくのだ　そうだ　もう一度どうして　どこから奴らの死がはじまったのか

チューター　　玉川侑香